

THANKS

(VOL. 203)

BUSINESS NEWS LETTER

発行日：平成26年5月1日
発行者：有限会社サクスマインドコンサルティング
連絡先：〒359-0043
埼玉県所沢市弥生町1792-10
TEL:04-2907-1715
E-MAIL：info@thanksmind.co.jp
<http://www.thanksmind.co.jp>

特集

「経営分析の基本④」・・・経済性分析

本誌では、「経営分析の基本（数字から会社の状況を把握しよう!）」というテーマを特集しています。

今回は、その4回目。

経営分析の柱のひとつである「経済性分析」について考えて行きましょう。

1. 「経済性」とは？ ～前回の復習

前回のTHANKSでは、経営分析の2つの切り口について説明しました。

安全性 = 「倒産する心配は無いのか？」

経済性 = 「上手に儲けているのか？」。



今回は、上記の2つの切り口の中で、まずは「経済性」に焦点を当てますが、そもそもの話として、「上手に儲けている」とは、どういうことでしょうか？

結論は以下の通りです。

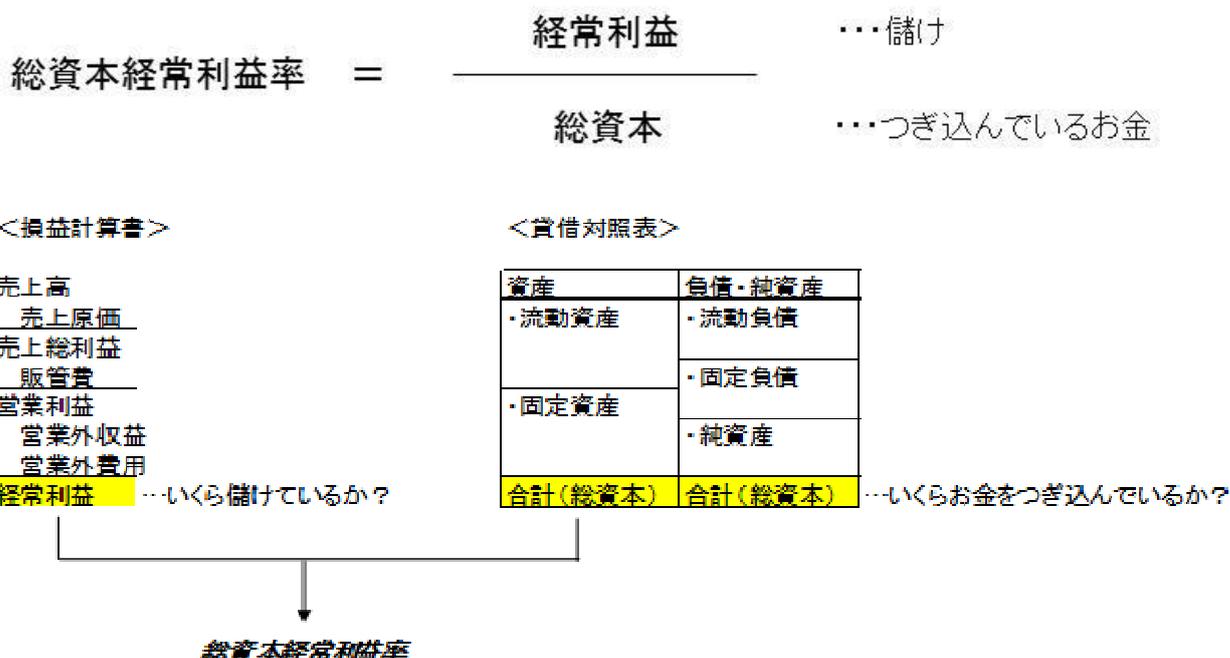
「上手に儲けている」ということは、「つぎ込んでいるお金に対して、たくさん儲けている」ということです。

つぎ込んでいるお金に対して儲けが多い ⇒ 経済性が良い（高い）

つぎ込んでいるお金に対して儲けが少ない ⇒ 経済性が悪い（低い）

それでは、会社の経済性は、どこを、どのように見て判断するのでしょうか？

2. 「総資本経常利益率」 = 経済性を判断する総合指標



まず、会社が「つぎ込んでいるお金」はいくらなのでしょう？

それは、貸借対照表を見ればわかります。

THANKS (200号)で説明した通り、貸借対照表は左側の箱が、ある時点で、その会社が持っている財産が書かれます。

そして、右側の箱が、その財産を作っているお金の出所(財源)です。

つまり、会社は、貸借対照表の右側のお金を様々な財産に変えて、経営をしているのです。

出所(財源)としては、借金もありますし、自分のお金もありますが、いずれにしても、そのトータルが、その企業につぎ込まれているお金です。

ちなみに、会計的には、その合計値は「総資本」と呼ばれます。

一方、「どれだけ儲かっているか」は何を見れば良いのでしょうか？

もう、分かりますよね。

言わずと知れた「損益計算書」です。

損益計算書には、いろいろなレベルの利益がありますが、「儲かっているかどうか」を判断する場合は、「経常利益」を用いることが一般的です。

経常利益の下にも、当期利益のレベルがありますが、これは、経常利益に「特別な利益や損失」を足したり引いたりした結果です。

その年の「特別なこと」を考慮しても、その会社の「本当の力」は判断できませんよね。

だから「経常利益」が大事なのです。

「回」という言葉に少し違和感があるかもしれませんが、つぎこんだお金が「何回売上に化けたのか」という意味です。

ということで、上記の式に当てはめると・・・
総資本経常利益率 = 2% (経常利益率) × 2.0 (総資本回転率) = 4.0%
当然、冒頭に書いた数字と同じになります。

なぜ、こんな面倒なことをしているのか？
単純に経常利益2億円 ÷ 総資本50億円 = 4.0%でいいじゃないか！
そんな声が聞こえてきそうです。
しかし、以下のケースを考えてみてください。

売上高 = 50億円 経常利益8億円 総資本 = 200億円

総資本経常利益率 = $8 \div 200 = 4.0\%$ と前ページの例と同じです。

しかし中身を分解してみると、
経常利益率 = $8 \div 50 = 16\%$
総資本回転率 = $50 \div 200 = 0.25$ 回

全然違いますよね。
前ページの例と比べると、経常利益率は抜群に良いけれど、総資本回転率は非常に悪いです。

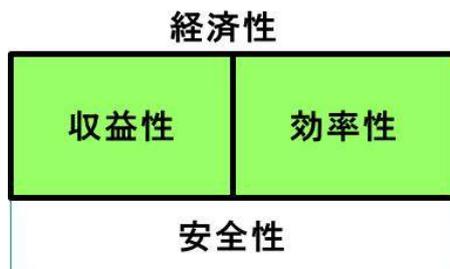
数字をどんどん分解して行くことの目的は、「どこが良くて、どこが悪いか」をはっきりさせるため
なのです。
それが分らないと、対策を打つことができませんから。

総資本経常利益を高めるためには、どうしたら良いのか？
もうお分かりですよ。
方法は以下の2つです。

- ①売上高経常利益率を高める …もっと儲ける
- ②総資本回転率を高める …もっと効率的にお金をつかう

ちなみに、「売上高経常利益率」は、「収益性」の判断指標。
また、「総資本回転率」は「効率性」の判断指標と言われます。

ということで、まとめると・・・
「経済性」は、以下の通り「収益性」と「効率性」に分解されるのです。



<次回につづく>